

神戸教育短期大学

教育実践研究紀要

第7号 [2024年度]

教育実践研究論文

<第3類>

- ・保育者養成校における領域横断的な防災教育の検討
—「防災リトミック」の開発と実践を通して—

(弘田 みな子)

(井本 英子)

(川戸 良子)

<第6類>

- ・「立体紙芝居」の製作と発表

(辻本 恵)

神戸教育短期大学

教育実践研究紀要

第7号【2024】

[教育実践研究論文]

<第3類>

- ・保育者養成校における領域横断的な防災教育の検討
—「防災リトミック」の開発と実践を通して—

弘田 みな子・・・ 5
井本 英子
川戸 良子

<第6類>

- ・「立体紙芝居」の製作と発表

辻本 恵・・・ 17

神戸教育短期大学「教育実践研究紀要」の発行および編集の手引き

1. 目的

本紀要は、大学教育に関する教育技術や方法論、教材活用等の知見を共有し、教育の質向上に貢献することを目的として発行する。

2. 投稿者の資格

本紀要に投稿できるのは、原則として本学の、専任教員・本務校を持たない非常勤講師・職員とする。ただし、編集会議で認めた場合、学外からの寄稿を掲載することができる。なお、本務校を持たない非常勤講師・職員が共著者の代表者で他大学を本務校とする専任教員・職員がその共著者である場合は認められない。

3. 編集会議・編集委員

本紀要の編集及び発行のために編集会議を置き、ファカルティ・ディベロップメント委員会（FD委員会）委員を編集委員とする。

4. 原稿の内容、投稿

(1) 本紀要で扱うものは全て「教育実践研究」とし、その内容は以下に分類される。

- 第1類 大学教育の理念や思想に関するもの
- 第2類 大学教育の制度、法およびその運用に関するもの
- 第3類 大学における専門教育に関する方法、技術、課題に関するもの
- 第4類 大学教育に適した教具・教材の開発およびその利用効果に関するもの
- 第5類 大学生の心身の特性と教育のあり方に関するもの
- 第6類 その他、大学教育の実践に関するもの

(2) 書式は、編集会議において別に定めるものを基本とする。ただし、原稿の内容に応じ、適切な章立てを利用することができる。

(3) 1原稿につき本誌10部を無償提供する。

(4) 投稿は、原則として、電子ファイルによる完全イメージ原稿とする。

5. 投稿に関する手続き

(1) 文の構成は、「問題の所在（または目的）」「方法」「結果」「考察」「結論」を基本とするが、教育分野や論の特性に応じて適切な章立てを設定することができるものとする。なお、参考・引用文献等がある場合、必ず文末に付記する。

(2) 原稿は原則として、Microsoft Word（表作成についてはMicrosoft Excelも可）により作成し、完成イメージで提出する。この場合、編集会議が配付するフォーマットを利用することが望ましい。その他、文字数・行数・フォント等、執筆の詳細についてはフォーマットを参照のこと。

(3) 原稿は、完成イメージで5頁以上とし、最大15頁とする。

(4) 写真、図については、各自が画像ファイルとして作成し、原稿内に貼り込むものとする。全てグレースケールで印刷されるため、出版時に画像の精細等に関する要求は一切受け付けない。ただし、カラー写真による掲載を希望する場合、自費(または個人研究費)により、載せることができる。

(5) 投稿にあたっては、電子メールに、投稿票、本文、写真・図の電子ファイルを添付し、FD委員会に提出する。

(6) 投稿者は、本学研究倫理規定を遵守しなければならない。投稿論文とともに神戸教育短期大学研究倫理チェックリスト用紙を提出する。

6. 編集に関する手続き

(1) 原稿が投稿されると、編集委員において精読し、編集会議において質問および意見をまとめ、投稿者に通知する。

(2) 編集会議が提示する意見や質問は、本誌が多様な読者を想定していることから、専門分野を熟知した内容でなくてよいこととする。

(3) 投稿者は編集会議から提示された質問や意見を踏まえて、回答または修正等を行い、再び提出する。その後、編集会議が採録の可否を決定する。

(4) 本学『研究紀要』に投稿された論文等が、同紀要の編集会議である本学研究委員会において内容的に本紀要への掲載が適当と判断され、投稿者がこれを了承した場合には、本紀要への採録を認めることができる。

7. 発行

本紀要は、原則として、年1回発行する。ただし、発行は投稿数に応じて編集会議で決定する。

8. 著作権

著作権および電子化による公開本誌に掲載された著作物の著作権は執筆者に属するが、著作物は原則として電子化し、国立情報学研究所等の公的機関のホームページに公開することを許諾するものとする。ただし、執筆者から電子化を承諾しない旨の申し出があった場合はこの限りではない。

保育者養成校における領域横断的な防災教育の検討

—「防災リトミック」の開発と実践を通して—

弘田 みな子 ・ 井本 英子 ・ 川戸 良子

HIROTA Minako ・ IMOTO Hideko ・ KAWATO Ryoko

近年の防災意識の高まりから、保育現場における防災教育のあり方について関心が高まっている。以前より行われてきた保育者や教員が主体となっておこなう避難訓練の形式以外にも、子ども達自身が主体的に判断して身を守る行動を取るための多様な防災教育の手法が提起され始めている。しかしながら、保育現場における防災に関して保育者養成段階において重点的に学ぶ機会やその内容の少なさが指摘され、改善が望まれている。今回、そのような状況へのひとつの応答として、就労後に保育現場において習得される避難訓練等のスキルとは別に、養成校段階で獲得可能なスキルとしての防災教育の検討をおこなった。音楽、運動遊び、製作など多様な技能を活用した領域横断的な防災教育の方法を開発し、保育者養成校学生による地域親子への「防災リトミック」の実践をおこなった。実践を通して見えてきた、「防災リトミック」の開発及び実践が有する保育者養成における意義について論じる。

キーワード：防災教育、防災リトミック、領域横断、保育者養成、共主体

1-1. はじめに

「養護」と「教育」によって成り立つ保育という営みにおいて、子ども達の生命を「守る」ことは最重要事項であることに疑いはない。そのためには、日々の園環境の整備や人的環境における安全管理の徹底の他に、自然災害に対する備えも重要な課題である。特に、事前の予測が難しい「地震」災害への対応は、定期的な避難訓練や園内環境整備の実施により、様々な想定を行い備える必要がある。

保育における安全について、『幼稚園教育要領』（文科省 2017）では、「避難訓練などを通して、災害などの緊急時に適切な行動がとれるようにすること」との記載がある¹。また、2019年に示された『「生きる力」を育む学校での安全教育』（文科省）においては、災害時の行動の仕方として「教職員や保護者の指示に従い行動できるようにする」ことが示されている²。これらの記述からは、保育現場での防災教育における子ども達の姿として、「避難訓練」等を通して、災害時に大人の「指示に従う」こ

とがひとつの目標として位置付けられていることがわかる。

一方で、2022年の『第3次学校安全の推進に関する計画』（文科省）においては、「子供の視点を加えた安全対策を推進」すること、「全ての児童生徒等が、自ら適切に判断し、主体的に行動できるよう、安全に関する資質・能力を身に付ける」こと等が盛り込まれた³。ここでは、安全対策を講じる際に、大人主導で対策を講じるのみでなく、「子供の視点」からも起こり得る状況を推測することや、子ども自身が主体的に判断できるような能力の養成にも目が向けられ始めていることがわかる。

保育施設において、災害等の発生時には、子ども達は「要援護者」⁴とされ、大人により安全を講じられ「守られる」存在であることに疑いはない。しかし、ただ受動的に守られるだけの存在であるだけでなく、安全と危険を判断し、判断に基づき基本的な行動を取ることができるような、保育者と子ども達とがそれぞれに主体的である「共主体」的な在り方が、防災教育において見出されるようになったことが窺われる。

保育現場における防災教育のあり方を巡り関心が高まる中で、地下・岡 (2021)、守・兪・伊藤・西浦 (2022)、木村 (2023)、西浦・伊藤・守・兪 (2023)、馬場・佐藤・高橋 (2024) 等の先行研究において、保育者養成における防災教育の意義及びそのあり方の検討がなされている。防災教育の、避難訓練的側面と、日常的な遊びにおける側面との両面から成る位置付けに関して、地下・岡 (2021) は、「就学前施設における自然災害に対する防災教育は、非日常的な避難訓練などの実施と防災につながる行動を身につけることができるような日常の生活や遊びを中心とした日常の中での保育活動の展開の2点が必要であり、保育内容領域『健康』だけではなく、保育内容5領域すべてに関係している」と指摘する。これらの点から、保育者と子ども達とが共主体的に作り上げていく日常的な防災教育のあり方の重要性が指摘されている⁵。

本稿では、近年の防災への関心の高まりや、防災教育のあり方の多様化が進められる中で、これからの防災教育に携わる保育者を養成する保育者養成校の、果たすべき役割や課題を論じる。特に、地下らが指摘するような、領域横断的な活動としての防災教育のあり方を重視し、今回「防災リトミック」の開発をおこなった。「防災リトミック」の開発およびその実践を通して、保育者志望学生の保育スキルの向上の可能性等について、以下で保育者養成における保育者の資質やスキル獲得に関する視点、保育者養成における音楽教育に関する視点、保育者養成における地域の子育て支援等の視点から考察する。

1-2. 防災教育と保育者のスキル

従来の、保育者主導型の避難訓練中心の防災教育と、新たに提起された子ども達と共主体的な関わりを重視する防災教育とでは、保育者に求められるスキルにどのような違いがあるだろうか。

まず、従来の保育者主導型の避難訓練中心の防災教育において保育者に求められるものは、園内の避難経路の理解及び整備、園内環境における避難計画の作成、子ども達への正確な指示出しや、保護者への迅速な引き渡しなどに集約されるだろう。これらは、園の立地や園内の教室の配置、通園している子どもの人数や保護者との連絡ツールの種類など、各園の具体的な状況性に紐づいた正確で迅速な対応が必要であり、その園に最適化された避難計画を遂行する能力が保育者に求められると言える。また、その様なスキルは、保育者として就労した後

の就労先の園に最適化した形式で獲得されるものと考えられ、就労年数等の経験値により向上していくスキルであると想定される。

一方で、子ども達と共主体的な関わりを重視する防災教育においては、子ども達が災害を知ること、関心を持つこと、災害時に自分自身で身を守るための初動を判断すること、あるいは避難するために必要な体力をつけること、避難生活のイメージを持つこと等、地震そのものへの関心や理解の促進、地震発生直後の行動、避難時の行動、その後の避難生活と、対象となる場面も多様である。またそれぞれの場面は、必ずしも各園の限定的な環境に紐づけられるものではなく、汎用的で日常的な「遊び」を介した多様な手法として展開する余地のあるものである。

その様な関わりにおける保育者のスキルとは、各園の環境に紐づいて最適化されるスキルとは異なり、子ども理解、対話活動、遊び理解、運動遊び、音楽遊びなど、汎用性の高い多様な保育スキルを横断して展開されるものであるだろう。

近年、個々の職場に特化されるのではなく、どの様な環境においても活用できるこのような汎用的スキルを「ポータブルスキル」と呼びその獲得が促されている⁶。保育者主体の防災教育の技能が状況性に強く依存するスキルであるのに対し、子ども主体の防災教育を展開するためのスキルは、多様な要素を持ち、固有の園環境に依存しないスキルであるという点で、保育者の、そして保育者養成校学生にとってのポータブルスキルになり得ると言えるだろう。

1-3. 保育者養成における「防災教育」の実態と課題

では、従来からの保育者主導型の防災教育のみならず、近年の保育者と子ども達との共主体的な防災教育も求められ始めた現在、保育者養成段階における防災教育の実態はどのような状況であるだろうか。

「防災教育」は従来、5領域においては「健康」に関連性の高い事項として扱われており、保育者養成校における「保育内容・健康」関連科目として授業が展開されている。山本 (2024) ⁷ は、『幼稚園教育要領』(文科省2017)、『保育所保育指針』(厚労省2017)、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』(内閣府2017) における、「健康」に関連する事項の内容を、「幼児に対して教育すべき事項」「幼児教育者として対応すべき事項」に整理し、またそ

の事項の、選定した27校の保育者養成短期大学における「保育内容・健康」関連授業科目のシラバスにおける出現率を明らかにしている。防災教育に関連する項目は、「幼児に対して教育すべき事項」においては、「見通しを持って行動する」「防災時の対応など安全について知る」が該当すると考えられ、「幼児教育者として対応すべき事項」においては、「防災に向けての施設・備品・計画整備」「避難訓練における保護者・地域との連携」が該当する。これら防災教育関連の内容の、各短期大学における「保育内容・健康」の授業シラバスにおける出現割合について、山本(2024)の調査において、「幼児に対して教育すべき事項」に分類される、「見通しを持って行動する」は出現数1で全体の0.5%、「防災時の対応など安全について知る」は出現数3で全体の1.6%であるとされる。また、「幼児教育者として対応すべき事項」に分類される、「防災に向けての施設・備品・計画整備」は出現数1で全体の0.7%、「避難訓練における保護者・地域との連携」も出現数1で全体の0.7%であることが示されている⁸。

以上より、保育者養成校における防災教育に関する授業は、子どもに対する教育内容の点でも、保育者が身につける知識等の点でも、領域「健康」全体の中ではその学修機会が非常に限定的であることが見出せる。

では、このような保育者養成校における防災教育に関する教育機会の少なさが、保育者養成校の学生の意識とどのような関連が見出せるのか、次節において考察していく。

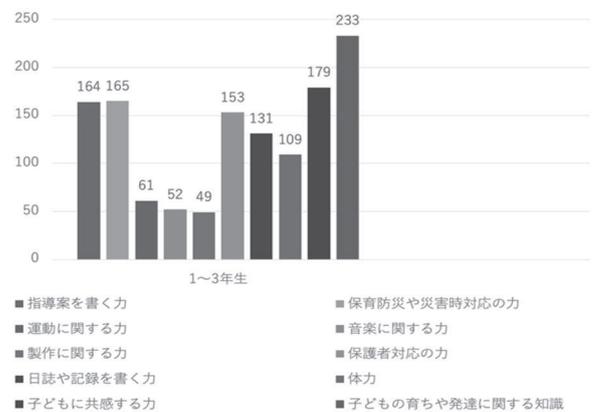
2-1. 保育者養成校学生の防災教育への意識

2024年10月、保育者養成系短期大学1年生～3年生を対象として「保育防災に関するアンケート調査」を行った。アンケート協力学生数はそれぞれ1年生117名、2年生83名、3年生61名の計261名であった。それぞれの学年が参加する授業内での無記名による調査紙への記述式でおこなった。倫理的配慮として、調査の目的及び内容の説明を行い、研究への協力は任意であり、成績評価等への影響のないこと、調査は匿名で行われること等を伝えた上で実施した。なお、本調査の実施にあたり神戸教育短期大学研究倫理委員会による承認を得ている。

調査における質問項目「将来保育者になるために身につける必要があると感じる力は何か」(表1)の問いにおいて、下記10項目の選択肢より当てはまると考えられるもの5つの選択を求めたところ結果は(図1)となった。

〈表1〉

項目「将来保育者になるために身につける必要があると感じる力は何か」選択肢
①指導案を書く力
②保育防災や災害時対応の力
③運動に関する力
④音楽に関する力
⑤製作に関する力
⑥保護者対応の力
⑦日誌や記録を書く力
⑧体力
⑨子どもに共感する力
⑩子どもの育ちや発達に関する知識



〈図1〉

〈図1〉の結果において、選択された上位3項目は、「⑩子どもの育ちや発達に関する知識」が261名中233人で最も多く、次いで「⑨子どもに共感する力」が179名、「②保育防災や災害時対応の力」が165名であった。また、「⑤製作に関する力」が最も少ない49名で、「④音楽に関する力」が次いで少なく52名、「③運動に関する力」が3番目に少なく61名が選択した。

これらの結果からは、保育者養成校の授業内容において高い頻度で取り上げられるものの、保育現場における実際の子どもの関わりを踏まえた上でその理解が深まると考えられる「子どもの育ちや発達」に関する力の必要性が重要視されていることがわかった。また、同様に、その力の必要性に関しては授業内容において取り上げられるものの、保育現場での実際の子どもの関わりにおいて身に付けられていくと考えられる「子どもに共感する力」の獲得も必要性が高いと感じられている。

さらに、「保育防災や災害時対応の力」への必要性が意識されているが、これは前節で指摘されているように保

育者養成校の授業内容として、扱われる機会の少なさが挙げられている様に、保育者養成校の学生にとって、学修機会の少なさからその必要性が認識されていると考えられる。また、上位1項目、2項目と同様に、保育防災における避難訓練などのスキルは、保育現場での実際の経験と紐づいたスキルとして認識されていることにより、今後学んでいく必要性が認識されていると考えられる。

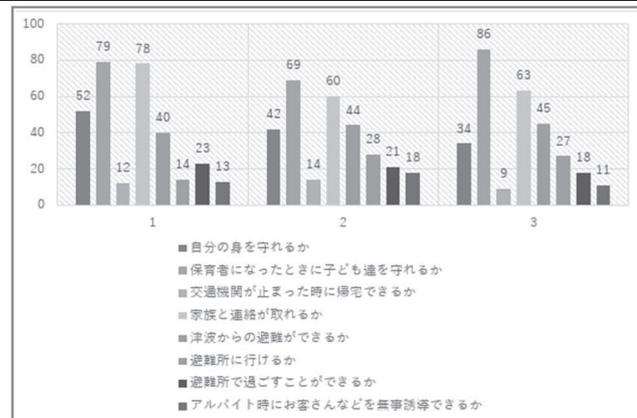
それに対して、身につける必要性が高く認識されていない項目に「製作」「音楽」「運動」の力が挙げられている。これに関してはアンケート実施短期大学を始めとして多くの保育者養成校において実技を含めて充実した授業回数や内容が展開されている科目であると考えられる。そのために、保育者養成段階において必要なスキルとして既に概ね身に付けている、あるいは今後身に付けることが出来そうであるという意識により、必要性が高いものとは認識されなかった可能性が考えられる。

次に、質問項目として「地震に関連して不安に思っていること」(表2)を下記8項目の選択肢より3つの選択を求めたところ、各学年における選択肢ごとの割合は(図2)の様になった。

(表2)

項目「地震に関連して不安に思っていること」選択肢

- ①自分の身を守れるか
- ②保育者になったときに子ども達を守れるか
- ③交通機関が止まった時に帰宅できるか
- ④家族と連絡が取れるか
- ⑤津波からの避難ができるか
- ⑥避難所に行けるか
- ⑦避難所で過ごすことができるか
- ⑧アルバイト時にお客さんなどを無事誘導できるか

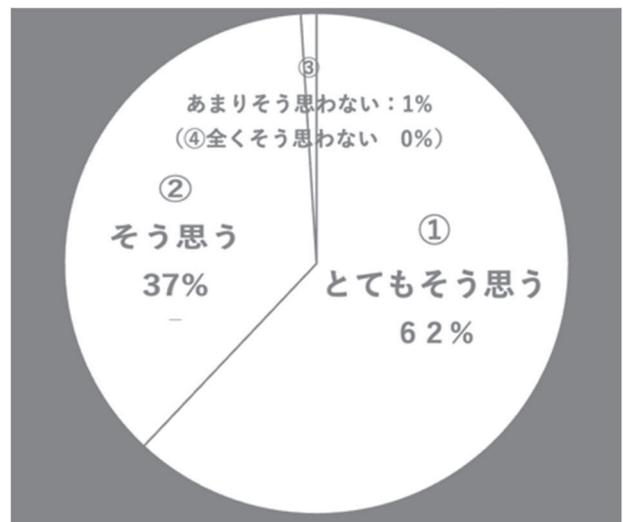


(図2)

質問項目「地震に関連して不安に思っていること」において、1年生から3年生まで共通して選択肢②「保育者になったときに子ども達を守れるか」の項目が選択される割合が最も多いことがわかる。また、次に割合の多い項目としても1年生から3年生まで共通して選択肢④「家族と連絡が取れるか」が選択された。さらに、学年ごとに見ると、最も多い項目と次点の項目の割合の差は、学年が上がるにつれて開いており、ここからは保育者を始めた子どもに関わる分野での就労が近づくにつれて、項目②「保育者になったときに子ども達を守れるか」という意識が強く現れているのではないかと考えられる。

続いて、質問項目「保育防災に関するスキルを身につけることは保育者として働く自信につながるか」に対して、①「とてもそう思う」②「そう思う」③「あまりそう思わない」④「全くそう思わない」の4件法による回答を求めたところ、結果は(図3)となった。

項目「保育防災に関するスキルを身につけることは保育者として働く自信につながるか」



(図3)

(図3)より261名の内99%が「とてもそう思う」あるいは「そう思う」を選択しており、保育防災に関するスキルを身に付けることが、保育者養成校の学生の保育者として働く自信につながるということがわかった。

以上の結果及び、保育者養成校における防災教育の現状から、保育者養成校において防災に関するスキルに関連した学びの機会を増やすことが急務であり、またそれによって保育者養成校学生の保育者としての就労への自信を涵養する可能性が示された。次項において、保育者

養成校における防災教育の開発と実践について概観していく。

2-2. 領域横断的な防災教育の開発

前節において、保育者及び保育者養成段階の学生における防災教育とは、避難訓練や保護者引き渡し訓練等、主に保育者として就労後に各保育現場の状況に最適化したものと、子ども達と保育者が共主体的に行なっていく、日常的な遊びを中心とした汎用的なものがあることを示した。また、保育者養成段階で獲得が可能なスキルは主に後者のような防災教育に関するスキルであり、それはどのような保育現場においても実践可能なポータブルスキルであることを指摘した。

今回、保育者養成校において、保育防災に関心のある学生を募集し、集まった1年生から3年生までの計25名と共に保育における防災を学ぶプロジェクトを立ち上げ、ポータブルなスキルとしての防災教育の開発及びその実践をおこなった。アンケート調査においては、「将来保育者になるために身につける必要があると感じる力」として、学修機会の少ない「保育防災や災害時対応の力」が挙げられたと同時に、現状として新たに身につける必要性が高くはないと捉えられている対象に、「製作」「音楽」「運動」の関連スキルが挙げられていた。今回、学修の必要性が認識されている「防災教育」の開発において、保育者養成校の学生達において既にある程度の力の獲得が実感されていると考えられる「製作」「音楽」「運動」に関連するスキルを活用していく可能性を検討した。

その結果、地震発生時に危険な場所や物を視覚的に理解するための「壁」や「ガラス窓」等の製作、避難時に必要な危険物を避けながら移動する多様な動きの獲得及び避難等に必要となる基礎体力の向上につながる運動、音楽の変化と共に地震発生時の初動に必要な動きへ誘うような音楽の活用等、「製作」「運動」「音楽」のスキルを横断的に活用した「防災リトミック」の開発をおこなった。

次節より、今回開発した「防災リトミック」における「音楽」の視点からの解説、次いで学生が地域の親子に向けおこなった「防災リトミック」の実践の概要および、防災教育に関する地域の保護者の意識等について述べていく。

3-1. 防災教育におけるリトミックの活用について

リトミックはエミール・ジャック＝ダルクローズ

(Emile Jaques-Dalcroze 1865-1950) が創案した音楽教育法であるが、心と身体の調和を図るこの教育法は音楽能力向上に限らず、想像力や集中力を引き出し個性や社会性を育む統合的な人間教育として様々な分野で用いられている⁹⁾。リトミックの活動は、5領域の中で相互に関連しながら健やかな発達を目指す保育・幼児教育において、「表現」の領域だけでなく、「言葉」や「人間関係」等の領域ともかかわり合うものであり、総合的に発達のねらいを達成していくための有効な活動である。今回、幼児のための防災教育の手法としてリトミックの活動を用いる理由は下記2点である。

1点目は緊急時に取りべき行動の定着のためである。今回、防災を学ぶために集まった学生達と共に、複数の防災関連絵本を読む中で、地震が起きた際の初動について最もわかりやすいと学生達が選択した絵本である、『おおじしん さがして、はしって、まもるんだ』¹⁰⁾に基づきリトミックにおける動きとその楽曲の作成をおこなった。

この絵本の中では「ウサギでさがして、ネズミではしって、カメでまもるんだ!!」というキャッチーな言葉で子どもが取るべき行動を示している。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 周りの様子を窺う・・・ウサギのポーズ 2. 素早く安全なところへ移動する・・・ネズミのポーズ 3. 頭を守ってじっとする・・・カメのポーズ |
|--|

この3種類の行動をそれぞれウサギ、ネズミ、カメのポーズを通して体験することで身に付けることを目的として、リトミック活動を用いることを考案した。地震で揺れた時に取りべき行動について、馴染みのある動物を重ねて具体化する、絵を見せるなどの視覚的なアプローチをすることは、理解しやすく記憶にも残りやすくなる。そこに音、音楽を重ねることでさらに子ども達に取りべき行動を促していく効果があると考えられる。例えばラジオ体操の音楽が鳴ると、定着した記憶が呼び覚まされ音楽と連動して身体運動することができる、という事象と同様である。

本来リトミックは、音楽と合わせた身体表現活動である。その中でも例えばダンスのように「振り」をつける身体表現活動とは異なり、ポーズを限定してそれを覚えることに注力するものではない。音楽に合わせて何らかの動物を表現するとしても、その動物のポーズを限定することはなく、音楽の表情や流れから即時的に表現することで、自由で創造性を伴う自己表現を伸ばすことで豊かな表現力を培うものではあるが、今回の防災教育の開発に

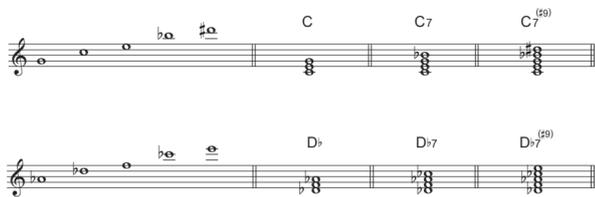
においては、必要なポーズをとるために、リトミックの手法を効果的に用いている。

2点目は、緊急地震速報のチャイム音（譜例 1）の認知である。



（譜例 1）

緊急地震速報のチャイム音は、（譜例 2）に示すように C7(#11)とD♭7(#11)の和音を第5音から上行にアルペジオで駆け上がる音の構成でできている。最初の3音までは一般的に明るい和音といわれる長三和音の第2転回形だが、それに続く第4音との音程が減5度になる。この音程は最も不快な音程で不快な響きとなり、そのあとにこの和音全体にとっても緊張感の高い#11thというテンションノートが続くことで、この5つの音の並びが不安定さを感じさせる。引き続いて半音上がって同じ構成の和音が鳴る。緊張したまま（不安定な心地のまま）の和音が連続して鳴るわけだが、緩和しない（安定した音にならない）まま繰り返される。この5音の並びを速く駆け上がるアルペジオで鳴らすことで、緊急であるというサインを感じるようになる。



（譜例 2）

上記の和音の特性を生かして作られた音だが、作曲者の伊福部達（1946—）は、後に、『「緊急性は感じさせるが不安感を与えない」ということで自信を持っていたのであるが、頻りに流れる地震警報チャイムを聞いているうちに、チャイムから悲劇を連想する人たちも増えてきており、音の持つ情緒あるいは情動に訴える力の大きさに驚かされている』¹¹と述べている。

追体験によって感じ方が変化することは否めないが、子どもたちがリトミックで予めこのチャイム音を体験して認識することで、緊急地震速報のチャイム音を聞いた時に、その音から学習した行動を呼び覚まし不安感を持たずに緊急性のみを感じ取って初動の動きを実行できることが目的である。

3-2. 「防災リトミック」の題材の楽曲について

今回開発した「防災リトミック」においては、保育者がリトミック活動として展開できる楽曲「タッターラ ラララのマーチ」（2024井本英子）を使う。

「タッターラ ラララのマーチ」の楽曲構成（図4）は、シンプルで、耳なじみがよく、具体的ではなく、メロディーも伴奏も変奏しやすい楽曲になっている。

- 4分の4拍子
- **A** (a—a) — **B** (b—b')の二部形式
- 16小節
- ニ長調
- メロディーの音域は音階第1音から第5音
- 歌詞はオノマトペ
- **A** の和声はトニック（主和音）とドミナント（属和音）
- **B** の完全終始以外は導音を使用しない

（図4）

「タッターラ ラララのマーチ」のテーマ **A**（譜例 3）は保育者がいろいろな音楽あそびをする際の題材としての汎用性を勘案して、使いやすい4分の4拍子であるが、歩くときには1小節を「1, 2, 1, 2」と2拍子として捉える。基本的には音楽に合わせて「歩く」時のテーマ曲である。



（譜例 3「タッターラ ラララのマーチ」**A**）

B（譜例 4）は、2小節のモチーフを変奏することによって曲想を変えて、ジャンプ、ゴロゴロ、ターン、スイング等、様々な身体表現に適応した音楽になる。その一つとして、いろいろな動物になって、動物の特徴を捉えた多様な身体表現を展開することができる。防災リトミックでも前段階として「ウサギ」「ネズミ」「カメ」の身体表現をこの曲で展開できる。



(譜例 4 「タッターラ ラララのマーチ」 B)

3-3. 楽曲の展開例

「防災リトミック」における「タッターラ ラララのマーチ」の展開例を以下に記す。

(1) 「タッターラ ラララのマーチ」のAを用いる。

- ①「子どもたち」のマーチとして等速感が意識できるように歩く。
- ②音楽テンポや曲想などの様々な変化を織り交ぜて、音楽を捉えて表現できるように歩く。
- ③「動物」のマーチとして、それぞれのキャラクターに合わせた曲想(表情、テンポ、ダイナミクス等)で演奏し、子どもたちは、ウサギになってぴよんぴよん跳ねて行進、ネズミになって早足で忙しそうに行進、カメになってのっそり歩いて行進など、3種類の動物になり歩く。

(2) 緊急地震速報のチャイム音

- ①緊急地震速報のチャイム音(譜例1)をピアノでゆっくり鳴らす。
- ②理解・周知ができたところで、徐々にテンポを上げて本来の速さで鳴らす。
- ③「この音が鳴ったら、ウサギのような長いお耳で周りの様子をよく聞いて、キョロキョロ周りを見してみる」旨の指示とともに「ウサギ」(譜例 5)の曲で身体表現活動。



2,4,6小節目はpoco rit. 8小節目はmolto rit.

(譜例 5 「ウサギ」)

- ④「素早く安全なところに移動する」旨の指示とともに「ネズミ」(譜例 6)の曲で身体表現活動。



(譜例 6 「ネズミ」)

- ⑤「頭を大切に隠してじっとする」旨の指示とともに「カメ」(譜例 7)の曲で身体表現活動。



(譜例 7 「カメ」)

- ⑥ 親子の場合、「カンガルー」(譜例 8)の曲でカンガルーの親子のように子どもを抱っこして、ぎゅっとくっつく身体表現活動。



(譜例 8 「カンガルー」)

(3) 「タッターラ ラララのマーチ」で終了

行動パターンや安全を確保できたこと等を子ども達と確認しあって、楽しいマーチで活動を終える。

以上の観点より、子ども達の防災スキルを遊びの中で高めるために「リトミック」の手法を選択し、ねらいに沿った楽曲の作成をおこない、「防災リトミック」の開発をおこなった。

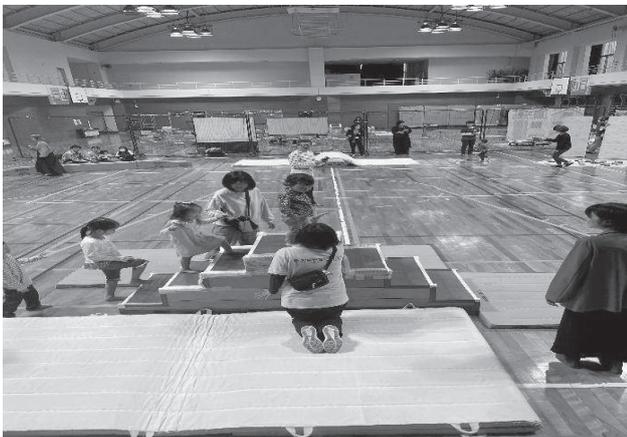
4-1. 学生による防災リトミックの実践

2024年5月より6か月にわたり保育防災や防災リトミックについて学んだ学生を中心に11月2日(日)10時から12時、本学講堂にて地域の親子を対象とした防災イベントを実施した。前述のアンケート調査において「将来保育者になるために身につける必要があると感じる力」に対する上位5項目回答に選択された「保護者対応の力」に対するスキル獲得の機会としても、今回のイベントを地域の親子連れ対象のイベントとすることで、学生の保護者対応に関わる経験にもつながると考えた。参加者は1歳から8歳の子どもと保護者計23人、保育者養成校学生14名であった。

はじめに、絵本『おおじしん さがして、はしって、まもるんだ』の著者である清永菜穂さんの講話を聞き、地震が起こった際の初動(1.周りの様子を窺うウサギのポーズ、2.素早く安全なところへ移動するネズミのポーズ、3.頭を守ってじっとするカメのポーズ)を知らせて一緒に考える時間を持った。その後親子でサーキット遊びのブースに移動し「防災リトミック」を行った。

一連の流れは以下である。

①「タッターラ ラララのマーチ」をピアノで演奏しながらサーキット遊びをする(写真1)。



(写真1)

②子どもたちは軽快なリズムにあわせてサーキット遊びを楽しむが、途中で緊急地震速報のチャイム音へと音楽が変化する。

③その後、音楽の変化とともにキョロキョロ周りを見る「うさぎ」の体勢を取る。

④素早く移動する「ねずみ」の動きをする。

⑤頭を大切に隠してじっとする「かめ」の身体表現活動へと誘導し、サーキットの中央の何も無い安全な空間へ移動する(写真2)。



(写真2)

⑥最後に「カンガルー」の曲で保護者の元へ行きカンガルーの親子のように子どもを抱っこでゆらゆらして、ぎゅっとくっつく身体表現活動をして終了する。

この防災リトミックの一連の流れは、サーキット遊びとともに繰り返し行った。防災リトミック開始時の子どもたちはサーキット遊びに夢中になっており、音楽の変化に気づくことが出来るように学生がアナウンスを行った。また視覚的にも認識しやすいよう音楽の変化とともに動物のパネルを見せて身体表現活動へと誘導した。それらの働きかけにより、はじめは学生のアナウンスや保護者の働きかけによって音楽の変化に気づき動く受動的な姿が見られた。

しかし何度か繰り返すうちに子どもたちが、自ら音楽の変化に気づき、主体的に身を守る動きを取る姿がみられた。参加した子どもの年齢は様々であったが、短時間の活動でこのような姿が見られたことから「防災リトミック」を日常の保育の中でリトミック遊びとして継続しておこなうことは、子ども自らが環境の変化に即時反応して動くということにつながるのではないかと考える。

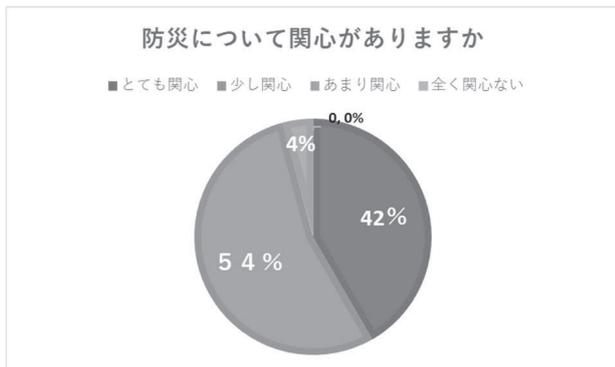
以上の点より、園全体で行う防災訓練だけではなく、「防災リトミック」のように、担任と子ども達が日常的な遊びや活動の中で防災の知識や災害時の初動、環境の安全に関する判断力を主体的に身につけるための防災教育の手法を獲得することは、保育者や保育者養成校学生

の保育スキルの向上につながるとともに、現在望まれている、子ども達の主体的な防災スキルを育むことにもつながっていくのではないかと考えた。

4.2.保護者の意識

2024年10月および11月に、1歳から15歳の子どもを持つ保護者48名に対して防災教育についてのアンケート調査を行った。倫理的配慮として、調査の目的及び内容の説明を行い、調査は匿名で行った。なお、本調査の実施にあたり神戸教育短期大学研究倫理委員会による承認を得ている。

調査における質問項目「防災について関心がありますか」の質問に対して、①「とても関心がある」②「少し関心がある」③「あまり関心がない」④「全く関心がない」の4件法による回答を求めたところ、〈図5〉の通り、「とても関心がある」「少し関心がある」と答えた人は全体の96%であった。



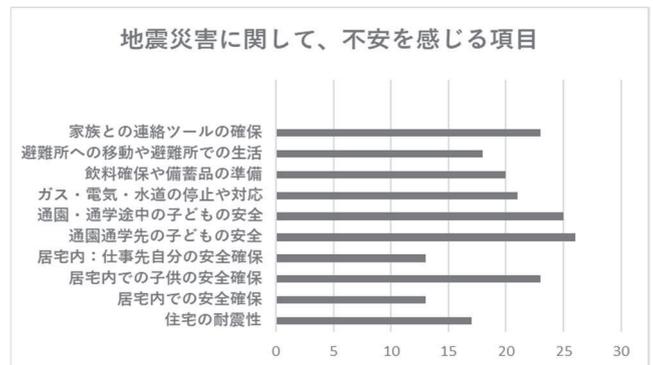
〈図5〉

次に質問項目「地震災害に関して不安を感じる項目」〈表3〉の問いにおいて下記10項目の選択肢より複数回答可能として訪ねたところ結果は〈図6〉となった。

〈表3〉

項目「地震災害に関して、不安を感じる項目をすべてお答えください」選択肢

- ① 住宅の耐震性
- ② 居室内での安全確保
- ③ 居室内での子供の安全確保
- ④ 居室内や仕事先での自分自身の安全確保
- ⑤ 通園・通学先にいる子どもの安全
- ⑥ 通園・通学途中の子どもの安全
- ⑦ ガス、電気、水道の停止やその対応
- ⑧ 食料確保や備蓄品の準備
- ⑨ 避難所への移動や避難所での生活
- ⑩ 家族との連絡ツールの確保



〈図6〉

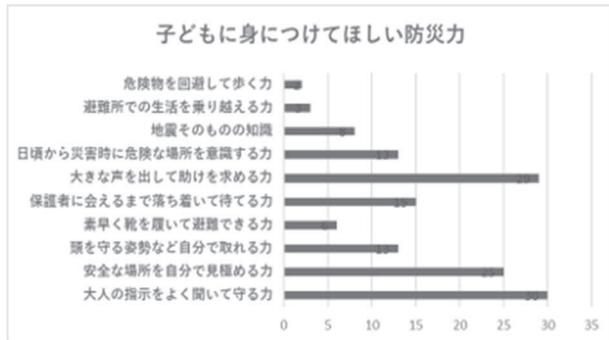
〈図6〉の結果において選択された上位3項目は「通園通学先の子どもの安全」「通園・通学途中の子どもの安全」であり、親から離れる場面における子どもの安全に対して不安が持たれていることがわかる。

次に質問項目「子どもに身につけてほしい防災力」〈表4〉の問いにおいて下記10項目の選択肢より3つ選択し、回答を求めたところ結果は〈図7〉となった。

〈表4〉

項目「お子様に身につけてほしい防災力として、特にあてはまる3つをお答えください」選択肢

- ① 大人の指示をよく聞いて守る力
- ② 安全な場所を自分で見極める力
- ③ 頭を守る姿勢などを自分でとれる力
- ④ 素早く靴を履いて避難できる力
- ⑤ 保護者に会えるまで落ち着いて待てる力
- ⑥ 大きな声を出して助けを呼べる力
- ⑦ 日頃から災害時に危険な場所を意識する力
- ⑧ 地震そのものの知識
- ⑨ 避難所での生活を乗り越える精神力よく聞いて守る力
- ⑩ 危険物を回避して歩く力



〈図7〉

〈図7〉の結果において選択された上位3項目は「大人の指示をよく聞いて守る力」や「大きな声を出して助けを求める力」および「安全な場所を自分で見極める力」であった。保護者は子どもに対して教師や保育者からの指示を聞く力と合わせて、「自分で判断し、自分を守る力」を身につけて欲しいと願っていることが示されている。

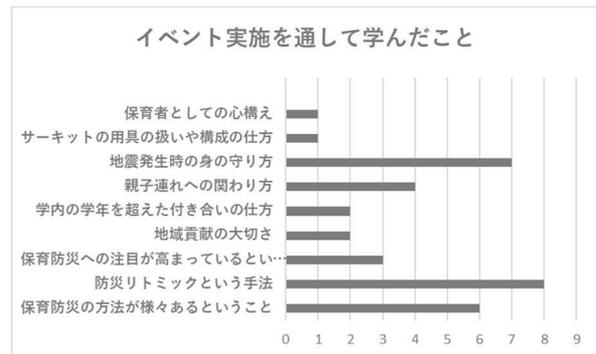
これらの保護者へのアンケートからも、現在の防災教育への意識として、子どもが主体的に防災力を身につけることが期待されていることがわかる。このような保護者の防災教育への意識の高まりに応えることも、保育者養成校における使命のひとつと捉え、今回、子ども達が主体的に防災に関わることができる遊び＝「防災リトミック」を開発し、その実践を地域の親子に向けておこなった。

4-3.防災イベント参加学生の意識

今回の地域イベントに参加した学生14名を対象にイベント終了後のアンケート調査を行った。質問項目「このイベントの実施を通して学べたことは何ですか」〈表5〉の問いにおいて下記9項目の選択肢より当てはまるものを複数回答可能とした結果は〈図8〉となった。

〈表5〉

項目「このイベントの実施を通して学べたことは何ですか」選択肢	
①	保育防災の方法が様々あるということ
②	防災リトミックという手法
③	保育防災への注目が高まっているということ
④	地域貢献の大切さ
⑤	学内の学年を超えた付き合いの仕方
⑥	親子連れへの関わり方
⑦	地震発生時の身の守り方
⑧	サーキットの用具の扱い方や構成の仕方
⑨	保育者としての心構え



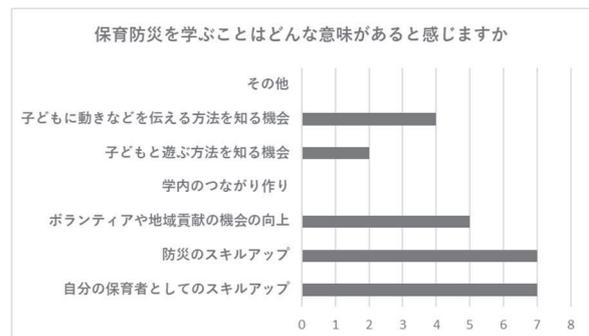
〈図8〉

〈図8〉の結果において、選択された上位3項目は「防災リトミックという手法」8名「地震発生時の身の守り方」7名「保育防災の方法が様々あるということ」6名であった。

次に質問項目「保育防災を学ぶことは、どんな意味があると感じますか」〈表6〉の問いにおいて下記6項目の選択肢より当てはまるもの複数回答可能として求めたところ結果は〈図9〉となった。

〈表6〉

項目「保育防災を学ぶことは、どんな意味があると感じますか」選択肢	
①	自分の保育士としてのスキルアップ
②	防災のスキルアップ
③	ボランティアや地域貢献の機会の向上
④	学内でのつながり作り
⑤	子どもと遊ぶ方法を知る機会
⑥	子どもに動きなどを伝える方法を知る機会

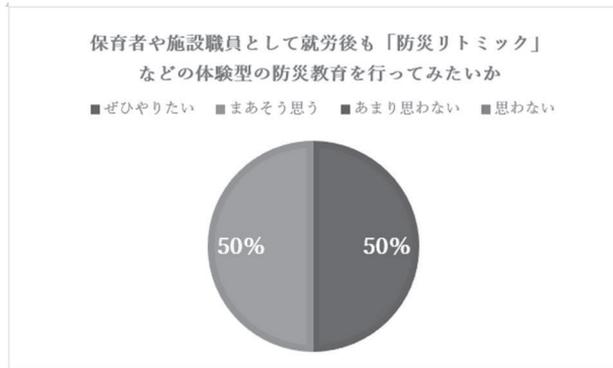


〈図9〉

〈図9〉の結果において選択された上位3項目は、「自分の保育士としてのスキルアップ」と、「防災のスキルアップ」が共に7名、「ボランティアや地域貢献の機会の向上」が5名であった。

次に質問項目「保育者や施設の職員として就労後も防災リトミックなどの体験型の防災教育を行ってみたい

と思いますか」の問いに対して、①「とてもそう思う」②「そう思う」③「あまりそう思わない」④「全くそう思わない」の4件法による回答を求めたところ「ぜひやりたいと思う」7名「まあやりたいと思う」7名であった(図10)。



(図10)

この結果より、今回の防災イベントに参加した学生は保育防災の手法を知る機会となり、自身の保育のスキルアップになったと感じていることがわかった。「防災リトミック」の開発と実践は、学生自身が将来保育者として身につけることが必要不可欠であると感じるものの、現状においては学修機会の少ない「保育防災や災害時対応」を学ぶ、意義のある機会となったと言えるだろう。

5.考察と今後の課題

以上、保育者養成段階における学修機会や保育現場における実施機会の充実が望まれる、保育者と子ども達との共主体的な防災教育の開発の意義及び実践の経緯を論じた。また、今回開発した「防災リトミック」の解説、およびその実施を通じた保育者養成校学生のスキル獲得について考察した。「防災リトミック」は、保育現場において必要とされ始めた、日常的な遊びを介した防災教育の手法となることに加え、保育者養成校学生に必要とされつつも現状のカリキュラムにおいては学修機会が少ないとされる防災教育の機会の拡充に貢献する可能性があることが示された。さらに、「防災リトミック」のような多領域の要素を持つ実践は、防災教育の学修機会を領域「健康」関連授業に限定するものではなく、多様な授業内で展開する可能性を拓くものでもあった。

今回の実践は、防災教育の学修を希望する少数の学生と教員との協働により行われた取り組みであったが、今後

は多様な領域に関連させることで、より多くの学生を対象とした授業内での実践として展開していくことが必要だろう。また、さらなる方法論を学生のアイデアを基に考案し、新たな防災教育の方法論の開発を継続していくことにより、保育者養成段階において身につけられるポータブルスキルの充実を目指していくことを、合わせて今後の課題としたい。

附記

本稿の一部は第76回関西教育学会(京都大学2024年11月30日)において、「遊びを通じた乳幼児の日常的な防災教育の検討-保育者養成校における領域横断的な『防災リトミック』の開発と実践-」として弘田・川戸により口頭発表されている。

6.引用文献・参考文献

- ・木村佐枝子「幼稚園教諭・保育士を志す大学生の防災教育の展開-アイリンプループロジェクトに学ぶ『いのちの教育』-」常葉大学健康プロデュース学部雑誌、17巻、pp15-22、2023年
- ・清永奈穂(文・監修)・石塚ワカメ(絵)『おおじしんさがして、はしって、まもるんだ 子どもの身をまもるための本』岩崎書店、2023年
- ・守・兪・伊藤・西浦「東日本大震災に学ぶ防災教育プログラムの開発と評価に関する研究-保育者養成カリキュラムにおける保育内容(健康)、保育内容(環境)、教育相談教育心理学の視点から-」宮城学院女子大学発達科学研究、22巻、pp37-46、2022年
- ・地下まゆみ・岡みゆき「幼児期における防災教育の実践に関する研究」大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要、11号、pp35-44、2021年
- ・西浦・伊藤・守・兪「保育者養成における防災教育プログラム開発と教育評価に関する研究-テキストマイニングを活用した定性的・定量的データの同時分析-」宮城学院女子大学発達科学研究、23巻、pp73-79、2023年
- ・馬場・佐藤・高橋「保育者志望学生の自信防災意識と地震防災教育への課題」岡山大学大学院教育学研究科研究集録、185号、pp83-91、2024年
- ・細尾・柏木 編『小学校教育用語辞典』ミネルヴァ書房、2021年
- ・山本章雄「保育内容・健康における教育内容の検討(4)-適正な授業構築に向けたシラバスの内容検討」神戸教育短期大学教育実践研究紀要、6号、pp.5-17、2023年

¹文部科学省「幼稚園教育要領」2017年
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/index.htm (2024年11月16日参照)

²文部科学省『『生きる力』を育む学校での安全教育』2019年
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/04/03/1289314_02.pdf (2024年11月15日参照)

³文部科学省「第3次学校安全の推進に関する計画」2022年
https://www.mext.go.jp/content/20220325_mxt_kyousei02_000021515_01.pdf
(2024年11月14日参照)

⁴内閣府(災害時要援護者の避難対策に関する検討会)「災害時要援護者避難支援ガイドライン」(2006年)において、幼児は「災害時要援護者」として明記された。
<https://www.bousai.go.jp/taisaku/youengo/060328/pdf/hinanguide.pdf> (2024年11月20日参照)

⁵地下まゆみ・岡みゆき「幼児期における防災教育の実践に関する研究」大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要、11号、pp35-44、2021年、p 37

⁶厚生労働省「ポータブルスキル見える化ツール(職業能力診断ツール)」において、ポータブルスキルとは、

「職種の専門性以外に、業種や職種が変わっても持ち運びができる職務遂行上のスキルのこと」とされ、「仕事の仕方(対課題)」と「人との関わり方(対人)」とに分類されており、転職を等のキャリア形成を考える際の指標のひとつとされている。厚生労働省HP
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_23112.html
(2024年12月7日参照)

⁷山本章雄「保育内容・健康における教育内容の検討(4)適正な授業構築に向けたシラバスの内容検討」、神戸教育短期大学 教育実践研究紀要 第6号、2023、pp. 5-17

⁸同上書 p 13

⁹細尾・柏木 編『小学校教育用語辞典』(井本英子「リトミック」p331)、ミネルヴァ書房、2021年

¹⁰清永奈穂(文・監修)・石塚ワカメ(絵)『おおじんさがして、はしって、まもるんだ 子どもの身をまもるための本』岩崎書店、2023年

¹¹毎日新聞「暮らしの中の科学」
<https://mainichi.jp/articles/20240425/k00/00m/100/221000c> (2024年12月9日参照)

第6類

「立体紙芝居」の製作と発表

辻本 恵

TSUJIMOTO Megumi

本学の「こどもと造形Ⅰ」「こどもと造形Ⅱ」の授業で取り組んでいる「立体紙芝居」の製作は本学独自の手作り教材の作成として長年にわたって実施されてきた。これまでの記録から見るとその内容は時代によってさまざまに変化しているが指導方法は年月の中でそぎ落とされ追加され検討されてきたことにより築きあげられてきたものと考えられる。その指導の中で学生は自らの保育観に基づいて思い思いの作品を創り上げていく。

本稿では2024年度前期に実施した「こどもと造形Ⅰ」「こどもと造形Ⅱ」の授業で取り組んできた「立体紙芝居」の製作と、2022年度より新たに取入れた本学付属園でのzoomによる発表について、その授業内容を報告するとともに、学生作品について紹介したい。

キーワード：手作り教材、立体紙芝居、発表、保育力

1. はじめに

「立体紙芝居」の製作の内容は「図工演習」で長らく取り入れられてきた。残されている記録を見ると昭和63年に第9回の「立体紙芝居」作品展が開催されている。2023年度より「図工演習」から「こどもと造形Ⅰ」「こどもと造形Ⅱ」へと授業名を変え引き継がれる形となったが本年度で37年以上の歴史を刻んでいることになる。

「こどもと造形Ⅰ」「こどもと造形Ⅱ」は週に1コマずつ行われる。「立体紙芝居」のボリュームからこれらを同シラバスとし週2コマを製作に充てている。

「こどもと造形Ⅰ」「こどもと造形Ⅱ」は保育士資格取得必修科目である。「図工演習」がそうであったように、学生はまず同じく保育士資格取得必修科目である「保育内容・造形表現Ⅰ」（2024年度入学生より科目名が「保育内容・造形表現の指導法」に改められた）を受講し、造形の技法や様々な素材に触れる。「立体紙芝居」の製作目的の1つは以下の通りである。（付録に配布資料を掲載）

*これまでの授業を通して学んできた技法や素材の扱い方を活かして、総合的な作品としての「立体紙芝居」を製作する。

学生は「保育内容・造形表現Ⅰ」で保育士に必要とされる造形の基礎的な表現技術を身につけ「立体紙芝居」に取り組むこととなる。

「立体紙芝居」のもう1つの目的は

*手作りの教材として実習等、教育現場や保育現場で役立つ。

である。

この目的を達成するために本学付属園にお願いし、発表をオンタイムで鑑賞していただくこととした。

この方法はコロナ禍の中で発表をオンラインで行ったことがきっかけであった。学生とともに鑑賞してくれた子どもの反応に学生たちの目の色が変わったことを記憶している。オンラインであっても「立体紙芝居」を子どもたちの前で発表することは保育力の向上につながると考える。

さらに子どもたちが実際に自分の作成した「立体紙芝居」を鑑賞するのだという緊張感が、学生のモチベーションを維持することを期待した。

紙芝居は「幼い子どもにとって楽しめる伝達手段であり同時に知る喜びや知的好奇心を育む」とされている。また「子どもたちの豊かな人間性を培う」¹⁾として期待される児童文化財でもある。長年紙芝居の製作が授業内

容として取り入れられてきたのはこのような児童文化財を身につけた知識や技術を使って手作り教材に仕上げるという継続性を持った授業展開が1つの理由であっただろう。さらに学生一人一人が表現を高め、楽しむ過程を大切にしながら自分自身の感性を磨いていくプロセスの一つとして紙芝居に「立体」という他にはない本学独自の表現を生み出したと考える。

今回は「立体紙芝居」の製作に加え、発表と事後に行ったアンケートを振り返り、どのような学びを得たのか授業実践報告をしてみたい。

2. 授業内容

1) 製作

「立体紙芝居」の製作は前述の通り「*手作りの教材として実習等、教育現場や保育現場で役立つ。」が目的の一つである。保育の現場で役立つ手作り教材として造形の授業で取り入れられたものと思われる。

「立体紙芝居」の製作条件として以下があげられる。

*対象年齢：3～5歳を基準とする

*枚数：10枚程度を基準とする。

*大きさ：四つ切 (B3)

*ストーリー：オリジナルのもの、または著作権による制限のないもの。

*その他：既成の紙芝居にはない工夫を取り入れる。(動く部分や仕掛けなど)

これらは製作時の目安として学生に提示するものであり、例えば乳児用に製作したいという学生がいれば指導やアドバイスもそれに応じるようにしている。

枚数に関しては「何枚以上ならよいか」という質問が学生からよくあがる。お話があつという間に終わってしまったり長すぎたりするストーリーでは子どもたちは紙芝居を楽しむことができない。見る側、楽しむ側の立場に身を置いてみることで自分の「立体紙芝居」に合った枚数が決まってくる。紙芝居の内容、製作計画とともに学生自身で枚数は決定していくがおおよそ8枚～12枚となる。

学生がなぜ枚数にこだわるのかというと「立体紙芝居」の特徴でもあるその大きさにあると思われる。1枚が四つ切サイズなので市販されている紙芝居よりも倍近く大きい。またその一枚一枚に仕掛けを施すとすると完成できるのかどうか不安になることもあるかもしれない。そのため仕掛けについては最もシンプルな仕掛けの二種類

を授業の初期段階で学生全員が試作する時間を設けている。試作することによって思っていたより簡単にできると学生自身が感じることができ、提案した仕掛け以外にもチャレンジするきっかけとなると考えている。

製作過程は

1. 登場人物（動物など）を作成する
2. 背景を作成する。
3. 背景の上に1で作った登場人物を配置し、動くようにする。(1枚目の完成)
4. 同様にして2枚目3枚目を完成させる。
5. 完成した3枚を自由に組み合わせてストーリーを完成し、プロットを描く。
6. プロットに従って残りの枚数を完成させる。

が方法としてあげられる。ストーリーを考え過ぎるがあまり時間に余裕がなくなる学生や、造形への苦手意識から製作が進まない学生への対応としてこの方法が定着したものと思われる。しかしこの方法も強制ではない。例えばストーリーを作ってから製作に進むという学生もいる。自主性が製作のモチベーションを維持することにもつながると考え、学生一人一人に合った方法を自分自身で選択するよう促している。

学生一人一人のよさを発揮し、自分なりの「立体紙芝居」を完成させるには多様な表現があることを理解する必要がある。そのため初回授業には先輩の「立体紙芝居」を鑑賞する時間を設けている。先輩の作品を鑑賞することで「立体紙芝居」がどのようなものなのかを知り、自分の製作計画を立てる一助とする。以前は実際に授業時に学生に演じてもらっていたが、時間割の都合や授業参加の公平さから現在は教員が作品を紹介したり、可能であれば先輩が演じているビデオを鑑賞したりする。

学生の製作に対する得意不得意は三者三様である。そのため鑑賞する「立体紙芝居」は仕掛けに尽力したもの、ストーリーが特徴的なもの、得意な絵を活かしたものなどさまざまな表現の「立体紙芝居」をとりあげるようにしている。登場する人形の素材や形もいろいろなものをとりあげて自分の表現の参考にできるようにしている。描くことが苦手だと感じる学生には人や動物を描かない方法を提示することもある。

さらに使用する材料・用具・技法についてはどのようなものを用いてもよく、ブリキ、トタンなど普通の造形の授業時でも扱うことのないようなものも参考に提案している。

先輩の「立体紙芝居」の鑑賞と材料・用具・技法についての確認、仕掛けづくりの体験をしたのち学生は各自

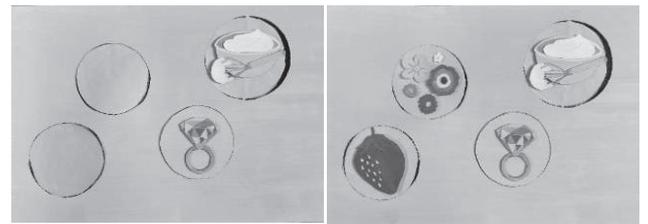
のねらいや目的に合わせたそれぞれの「立体紙芝居」に取り組んでいく。学生はそのものの感じを伝えるための様々な材料を吟味し、「保育内容・造形表現Ⅰ」で体験した技法などを使ってそれぞれの場面の雰囲気に最もふさわしいと思われる表現を工夫していく。ここからは製作する内容や仕掛けの方法も学生によって変わってくるので一斉授業ではなくほとんど個別指導となる。各々の学

生に応じたアドバイスやヒントを与え、励ますよう心掛けているが、学生同士での意見交換や互いに教えあう姿も見受けられ、学生たちの学習意欲の高まりを感じる。

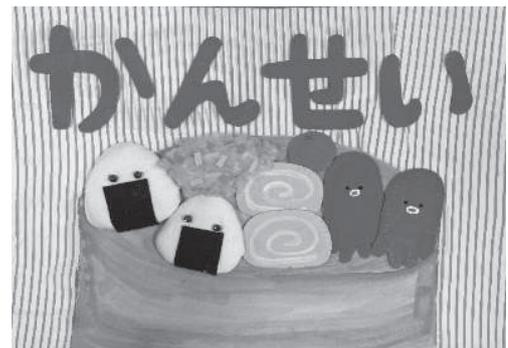
以下に学生たちの作品を紹介する。



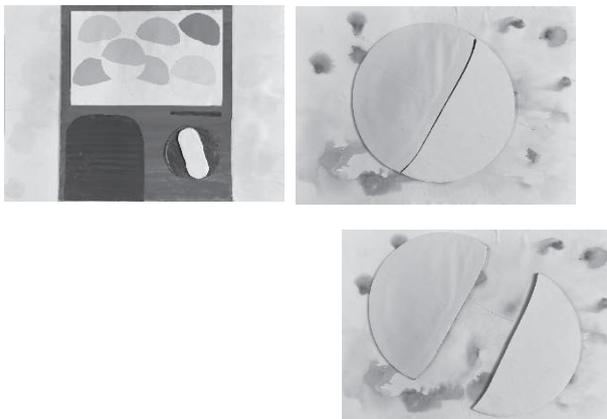
洗濯機には洗濯物が入っています。



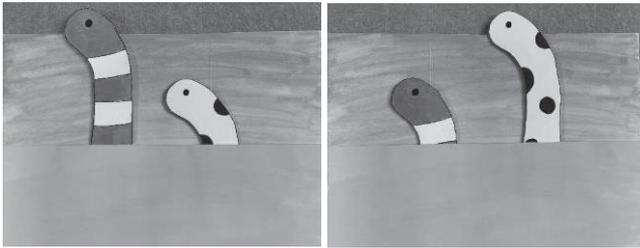
くると回すとイチゴやお花が出てきます。



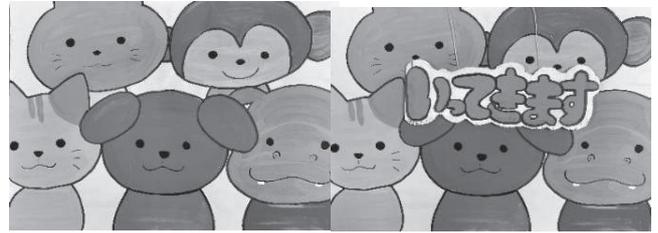
フェルトや布で柔らかな質感を出しています。



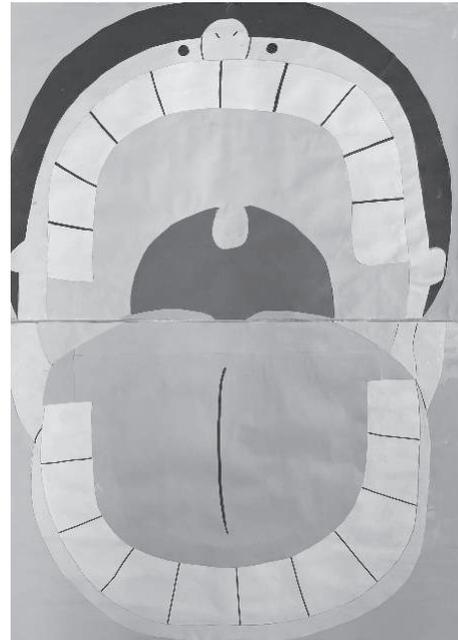
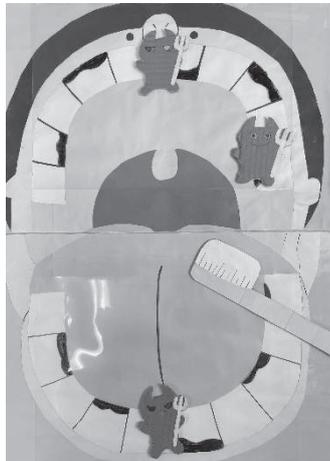
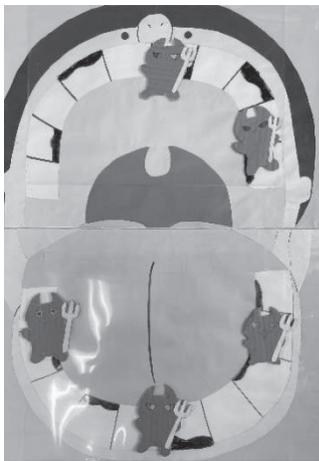
ガチャポンのダイヤルを回すとカプセルが飛び出します。カプセルからはプラモデルが出てきました。



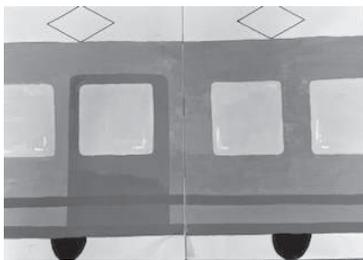
ちんあなごのかくれんぼ。



「いってきます」の文字が後ろから飛び出します。



大きなお口を歯磨きでゴシゴシ。するとお口の中はピッカピカ。



電車が到着。扉が開くと...

2) 発表

「立体紙芝居」は観客（子ども）の前で演じることを目標としているのですべての場面が完成した後に発表の練習を行う。一クラスの人数は30名程度なので1時間程度を1回の発表時間と考え授業時間の30回のうち2回を

発表に充てており、発表練習のための時間として1回を割り当てている。ロールプレイを繰り返す行ことで発表への期待が高まってくる様子がうかがえる。

発表は各グループで子どもたちへの言葉かけを考えるなど、始まりと終わりをわかりやすくするように心がけ、

大きな声でゆっくりと、表情豊かに読むよう指導している。登場人物の特徴を捉えて声色を変えたり、子どもたちの反応を汲み取って即興で答えたりすることも必要である。画面の向こうにいる子どもたちは画面を見ているのでビデオと勘違いすることもある。zoomとはいえオンラインで行っている発表であるからこそ子どもの反応が即座に伝わってくるのだから保育者としてアドリブを入れるくらいの余裕を持てるように自分の「立体紙芝居」を理解する必要があるだろう。十分な時間を確保したいがやはり造形の授業である以上製作に時間をかけるのは否めない。

発表練習の時間では友だち同士で声の出し方や場面のめくり方、仕掛けの動かし方などのアドバイスをしあう学生がいる一方で製作に時間がかかってしまい十分に演じる練習ができない学生もいるので、製作の段階でこの場面はどのように表現するのかなど教員から声掛けし、場面ごとに発表時を予想してストーリーの進め方、次ページへの移動や仕掛けを動かすタイミングなどをアドバイスするようにしている。

2024年度の発表は筆者の担当2クラスの学生を対象に以下のとおりzoomにて行った。

於：神戸教育短期大学付属
八尾ソレイユ認定こども園

各グループ10～15分程度 4名もしくは3名の発表

3Cクラス 27名

2024年7月22日（月）13名発表

7月25日（木）14名発表

2Aクラス 30名

2024年7月23日（火）16名発表

7月25日（木）14名発表

合計57名

3. 振り返りアンケート

対象学生57名に製作・発表の効果を図るため発表後に振り返りアンケートとして次のような記述を求めた。

・製作・発表を振り返って、どのような学びがありましたか。製作と発表に分けて記入してください。（自由記述）

以下に製作、発表に分けて振り返りを集約する。なお、

対象者には予めアンケートの趣旨を詳細に説明し、書面にて同意を得た。

製作に関して

大きく①子どもについて②仕掛けについて③素材・画材について④友達との協力について⑤その他にわけられた。

① 子どもについて

- ・どうすれば面白い、楽しいと思ってもらえるか、子ども目線で考えることが大切である。
- ・仕掛けや立体表現は子どもたちのワクワクを引き出す。
- ・作っていくうちにずっと子どもたちのことを考えて作っていると気づいた。

② 仕掛けについて

- ・思ったより簡単に楽しく作ることができた。
- ・何度も仕掛けを作ることで早くうまくできるようになった。
- ・仕掛けが面白かった。
- ・驚きや感動があった。
- ・身近なもので仕掛けを作ることができる。
- ・人形は大きい方が動きがわかりやすい。

③ 素材・画材について

- ・画材を組み合わせて描くことで表現の幅が広がった。
- ・素材の質感や手触りを大切にすることで使い方や可能性について考えられた。
- ・いろいろな素材を使う工夫を学んだ。
- ・構図や背景を工夫することで物語がより魅力的になる。

④ 友達との協力について

- ・友達と材料を共有したり意見を出したり聞いたりすることでよりよくすることができた。

⑤ その他

- ・楽しさと達成感を味わうことができた。
- ・自分の思いが詰まった愛情いっぱいの手作り教材を見せることも保育者として必要だ。
- ・作る人が楽しみながら取り組むことで様々なアイデアが生まれる。
- ・作る側、鑑賞する側の両方の目線で制作した。

発表に関して

- ・練習がもっと必要だった。
- ・リモートだったこともあってタイムラグがあった。

- ・子どもたちの反応が分かりづらかった。
- ・仕掛けを動かしながら物語を進めていくのが難しい。
- ・子どもと視線を合わせながらゆっくり読んでいる発表者、紙芝居に興味を示し反応していた。
- ・ゆっくり見せる、ゆっくり話すことの大切さ。簡潔でわかりやすい言葉を選ぶ。
- ・他の人の作り方が面白く、作品を鑑賞するのようになった。
- ・子どもが楽しく見てくれたのでやってよかったとやりがいを感じた。
- ・問いかけや声掛けがあると子どもたちをひきつけお話に入っていくやすい。
- ・読むときの一つ一つの行動が物語の一部になるということを感じながら発表することが子どもたちにとって楽しい読み聞かせになる。

4. まとめ

振り返りアンケートの「画材を組み合わせる」「素材の質感や手触りを大切に使う」「いろいろな素材を使う工夫」という記述からは、総合的な作品としての「立体紙芝居」を製作するという目的を達成していると考えられる。

また保育士間の連携・協働やコミュニケーションは欠かせないものと言われる。友達との協力についての記述は保育士同士の関係性を構築する心もちを育む一手となり得ることを示唆している。

しかし発表に関しては今後の検討を要する。

くじでのグループ分けであったことから発表内容が似通ったものが続くことがあった。このため教員が各学生の作品内容を把握してグループ分けを行うほうが良いであろう。

立体紙芝居は3～5歳を対象として製作したものであったが鑑賞する子どもが2歳児の時もあり内容の理解が難しかったのではないかと推察する場面もあった。どの時間帯に何歳児が鑑賞するのかなど付属園とのより綿密な打ち合わせが必要である。また付属園では先生方も発表を鑑賞しているため作品や発表に関するアンケートを実施し、学生へのフィードバックを行うなど発表内容や発表方法についての考察が求められる。

現行の授業内容では紙芝居の製作でほぼ授業時間を使うので発表のための準備がおろそかになりがちである。

目的を「*手作りの教材として実習等、教育現場や保育現場で役立つ。」とするのであれば紙芝居の演じ方の指導も要される。下読みの重要性、紙芝居の抜き方、仕掛けの動かし方、セリフの読み方に十分な指導時間を設ける必要がある。

Zoomによる発表であったことから必然とタイムラグが発生し、子どもたちの反応がタイムリーに届かなかった。この点に関してはクリアな音声、仕掛けがはっきりと見える画質の確保など技術的、機器的な向上も望まれる。それに加え立体紙芝居の特徴である立体であることや動きのある仕掛けを最大限に活かすならやはり対面での視聴の機会を設けることが効果的な提案になると考えられる。

以上、教員による検討や改善は今後取り組むべき課題であるが、学生はこの「立体紙芝居」の製作と発表を通して教材を作りあげた満足感だけでなく、子どもとのかかわり方や手作り教材を通したコミュニケーション力が少なからず身についたのではないかと思う。今後も「立体紙芝居」の製作・発表を継続し、本学独自の метод論が確立され学生の保育力を伸ばす一端を担うことを願う。

5. 引用文献

- 1) 清水 美智子 (2007) 紙芝居「演じることと語ること」一紙芝居のもつ特徴と効果を探る—
名古屋柳城短期大学研究紀要第29号 p47

6. 参考文献

- 小林 伸雄 (2017) 「立体紙芝居」の制作
夙川学院短期大学 教育実践研究紀要 第10号
- 平田 智久 小林 紀子 砂上 史子 (2015) 最新保育講座⑩保育内容「表現」
ミネルヴァ書房
- 浅井 拓久也・浅井 かおり (2018) 紙芝居に対する保育士の学びと活用に関する研究—どのような学びが紙芝居の活用につながるか—
未来の保育と教育—東京未来大学保育・教職センター紀要第5号

永井 久美子 (2021) 保育士間の連携・協働に関する研究動向—乳児保育における保育士間のコミュニケーショ

ンに焦点をあてて—
大阪保育大学紀要第16号

7. 付録

立体紙芝居の製作

1. 目的

- * これまでの授業を通して学んできた技法や素材の扱い方を活かして、総合的な作品としての立体紙芝居を製作する。
- * 手作りの教材として実習等、教育現場や保育現場で役立つ。

2. 条件

- * 対象年齢：3～5歳を基準とする。
- * 枚数：10枚程度を基準とする。
- * 大きさ：四つ折り（B3）。
- * 絵：オリジナルのものとする。
- * ストーリー：オリジナルのもの、または著作権による制限のないもの。
- * その他：規制の紙芝居にはない工夫を取り入れる。（動く部分や仕掛けなど）

3. 製作過程

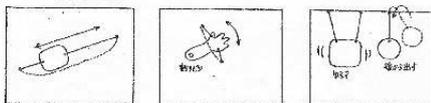
1. オリジナルの登場人物（動物など）を作成する。（動く部分などを考慮して）
2. 背景を作成する。（ある程度ストーリーを考慮して）
3. 背景の上に1で作った登場人物（動物など）を配置し、動くようにする。（1枚目の完成）
4. 同様にして2枚目3枚目を完成させる。（ストーリーを考慮して）
5. 完成した3枚を自由に組み合わせさせてストーリーを完成し、プロットを描く。（枚数決定）
6. プロットに従って残りの枚数を完成させる。

4. 製作上の留意事項

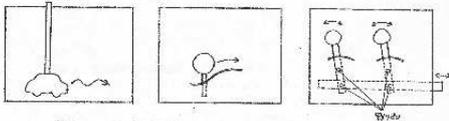
- * 自分の教育観、保育観に合わせる。
- * 使用の目的や意味を考慮する。
- * 使用する時期を考慮する。（季節感など）
- * 場面転換をはっきりさせ、視覚に変化を持たせる。
- * あまり細かい部分にこだわりすぎず、遠くからもよく見えるように、人物などは大きめに配置する。
- * ストーリーが長すぎたり、短すぎたりしない。また、離しすぎたり、簡短すぎたりしない。
- * あまり教訓的すぎなものより、子どもたちがワクワク・ドキドキしたり、楽しんだり、感動できるもの。

6. 仕掛け・動かし方

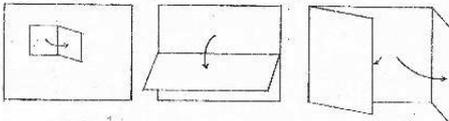
* 釣り糸を使う



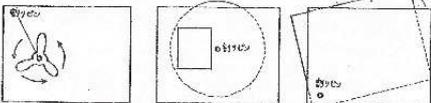
* 紙管（ロッド）を使う



* 扉（ページ）を開閉する



* 回転する



5. 材料・用具・技法

- * どのような材料・用具・技法を用いてもよいが、そのものの感じや場面の雰囲気表現するのに最もふさわしいと思われるものを工夫して使用すること。以下にその一例を掲げるので参考にしてほしい。

* 材料

- ・ 画材類：水彩絵の具、ポスターカラー、墨汁、インク、コンテ、パス、ラッカー、ニス、水性塗料、マーカー、サインペン、鉛筆、色鉛筆、その他
- ・ 紙類：画用紙、色画用紙、ケント紙、トレーシングペーパー、ボール紙、和紙、包装紙、セロファン紙、新聞紙、便ボール、紙ひも、その他
- ・ 布類：洋服地、和服地、白布、綿ジャージ、タオル地、ガーゼ、ベッテン、コットン、サテン地、ビニールクロス、ボア、皮革、毛皮、その他
- ・ 木材類：板材、角材、丸棒、ベニヤ板、パルサ材、竹、コルク、その他
- ・ 金属類：ブリキ、トタン、アルミ、針金、ピアノ線、金網、ねじ、ばね、ビス、ナット、金具類、空き缶、電化製品・時計などの部品、その他
- ・ プラスチック類：空き容器、発泡スチロール、その他
- ・ 日用品・家庭用品類：割り箸、つまようじ、アルミホイル、ポリ袋、キッチンテープ、紙筒、スポンジ、ナイロンたわし、マジックテープ、ひも類、各種容器類、その他
- ・ 産品・産材類
- ・ 自然物：石、砂、木、木の葉、木の実、樹皮、羽、リラ、その他
- ・ その他：糸、釣り糸、粘土、干菜用品、ガラス

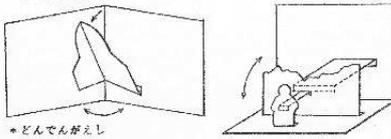
* 用具

- ・ 筆、ハケ、曹ブラシ、金網、ペン、ローラー
- ・ はさみ、カッターナイフ、円形カッター、彫刻刀、キリ、目打ち、コンパス、ピンセット、ヤスリ、のこぎり、糸鋸
- ・ 接着剤：木工用ボンド、ゴム皮革用ボンド、エポキシ系接着剤、その他
- ・ ハトメ、割りピン、ホッチキス

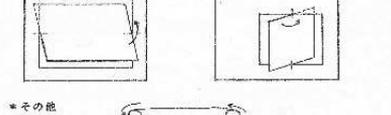
* 技法

- ・ 絵画技法各種、紙の造形、版画
- ・ コラージュ、砂絵、切り絵、押し絵、貼り絵、モザイク
- ・ 木などを彫る、粘土細工、ぬいぐるみ、パッチワーク
- ・ ペーパーカート、起こし絵、巻物、エポキシアート
- ・ その他各自の工夫次第で様々な技法が考えられる。また、あまり一般的ではない自分独自の技法などを使っても良い。

* ポップアップ



* どんぐりえし



* その他



* 風船



* マジックテープ



* フォーラム



<執筆一覧>

- 神戸教育短期大学 こども学科
講師 弘田 みな子/教育学関連（教育哲学）
子ども学および保育学関連（保育学）
- 神戸教育短期大学 こども学科
教授 井本 英子 /芸術実践論関連（芸術学音楽一般）
教科教育学関連（音楽教育学）
- 神戸教育短期大学 こども学科
講師 川戸 良子 /子ども学および保育学関連（保育の内容方法）
子ども学および保育学関連（保育子育ての支援制度）
- 神戸教育短期大学 こども学科
准教授 辻本 恵 /芸術学（彫刻）

神戸教育短期大学「教育実践研究紀要」

第7号（2024）

2025年 3月 31日発行

編集発行：神戸教育短期大学

ファカルティ・ディベロップメント委員会

〒653-0862 兵庫県神戸市長田区西山町 2-3-3

TEL:078-611-3351（代表）

イワサキ出版印刷有限公司

〒650-0027 兵庫県神戸市中央区中町通 4-1-17

TEL 078-367-6556

KOBE COLLEGE OF EDUCATION

Bulletin of College Educational Research

No. 7 [2024]

Articles (Applied Field Research)

<Category-3>

- Development of Cross-Disciplinary Disaster Prevention Education in a Nursery Teacher Training School
:Based on the Development and Practice of "Eurhythmics for Disaster Prevention"

...HIROTA Minako • IMOTO Hideko • KAWATO Ryoko

<Category-6 >

- Making and presentation of the three-dimensional picture story show

...TSUJIMOTO Megumi